



# フェミニズムの行方 - ジェイン・オースティン、 シャーロット・ブロンテと近代中国女性作家たち [全文の要約]

著者	劉 鳳斌
発行年	2015-03-31
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416甲第547号
URL	<a href="http://doi.org/10.32286/00000337">http://doi.org/10.32286/00000337</a>

本論文は、中国文化の時代的変容に呼応し、中国社会において実践的に適用できるイギリスの第一波フェミニズムの考え方を主軸に、それに伴走する形で登場するセクシュアリティを副軸に、19世紀英国小説と近代中国小説の中で登場するヒロインたちの変容を読み解くものである。

本論文は2部から成り、各部には3章ずつ割り当てられているが、それに序論と結論を加えた構成となっている。第一章から第六章は作品研究が中心となる。第一部では、ジェイン・オースティンの『高慢と偏見』、『マンスフィールド・パーク』とシャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』を取り上げ、考察の対象とする。第二部では、謝冰瑩の『ある女兵士の自伝』、丁玲の『ソフィ女子の日記』、張愛玲の『傾城の恋』、『金鎖記』、『赤薔薇と白薔薇』を取り上げ、考察の対象とする。これらの小説との関連で、第一波フェミニズムで展開されたセクシュアリティの議論がどのように結びつき、連結しているのか、さらにフェミニズムの視点を見据えて、その行く手にある女性である母親の持ち場と生き方について考察していく。

序論では、まず男性である筆者がなぜフェミニズムを研究しようとするかという動機について述べる。その次に第一波フェミニズムの主流となるリベラル・フェミニズムを概観したうえで、その理念を文章として著わした、リベラル・フェミニストとしてのメアリ・ウルストンクラフトの『女性の権利の擁護』とジョン・ステュアート・ミルの『女性の隷属』が取り上げられる。肝心なのは、ウルストンクラフトが男性を喜ばせる存在としての女性観を批判することや、ミルが女性の家父長制家族における法的不平等と教育・職業の機会における女性差別を批判することである。19世紀後半から西洋のリベラル・フェミニズムの理念は中国の政治や経済や科学の領域、また日常生活一般に浸透する。文学も、それと無縁ではなく、むしろその渦巻の中心に飛び込んで、1920年代前後の数十年間に、封建的家父長制への非難や女性の性欲自体の解放といったようなことを当時の中国社会の切実な問題としてきた。やや極端に、そのみがある数十年の中国の文学の関心事だった、ともいいたいほどのことである。

第一部では、ジェイン・オースティンとシャーロット・ブロンテの作品研究が中心となり、作品の中で表現したフェミニズム的要素に注目する。

第一章では、『高慢と偏見』と『ジェイン・エア』を取り上げ、フェミニズム批評的研究を踏まえた上で、ヒロインたちのリベラル・フェミニズムからの影響を考察する。この章の意図としては、家庭環境と社会環境が二人の作家の芸術形成にどのように影響力を及ぼ

すかを明らかにする目的もある。この点は、ブロンテの研究にとって、著しい重要なことだと考えられる。女性の立場の主張から見れば、エリザベスがダーシーと敬意を払い合える対等な関係を築こうとする様子が見えてくる。それに対して、女性解放の声を発したジェインは、男女同等の人格、女性の経済的自立を求める意識が強くあったと考えられる。実際の行動において、エリザベスとジェインはそれぞれ違う行動を取る。恋愛の主導権はダーシーの側にあつて、エリザベスは受け身の状態にある。それに対して、ジェインはロチェスターに対する愛情を、隠さずに感ずるままに表白し、女性の主体性を発揮する。このような相違点を形成する要因については、作家の家庭環境、階級、時代背景から分析することができる。

第二章の『高慢と偏見』では女性のセクシュアリティを表現するための表象手段となった舞踏会、エリザベスの瞳、散歩することに注目する。主人公、エリザベスとダーシーは自分の好き嫌いの感情を「言葉」に変えてはっきり表す場合が多い。この「言葉」は、口で言い出すというより身振り (body language) によって表現される。テキストの中で描いた舞踏会、エリザベスの瞳、二人の主人公が散歩することはそのような「言葉」として捉えられる。その「言葉」の背後には、オースティンは高い家柄を誇る家の当主としてのダーシーの自己変革を引き起こしたエリザベスのセクシュアリティを表現しようとする意識が反映されている。他方で、エリザベスに焦点を当てて考えれば、彼女の自己変容は複雑な人間関係によるところが大きいと考えられるだろう。エリザベスの自己変容からオースティンの複雑な人間関係に対する深い認識がうかがえる。

『マンズフィールド・パーク』では、セクシュアリティの表現を検証すると同時に、この作品の中でフェミニズム性がいかに表現されるかに注目する。未婚のヒロインが世間で失敗を経験し、幸せな結末で終わるオースティンの小説はしばしばシンデレラの物語に似ると言われている。しかしながら、『マンズフィールド・パーク』はシンデレラの物語より、むしろ東洋文化から生まれた「後宮闘争」の物語に似たところが多いと思われる。このような読みの流れの中で、前作『高慢と偏見』が「陰影が欠ける」だと言ったオースティンの気分は、『マンズフィールド・パーク』に移されることが読み取れる。それにフェミニズムの立場から見ればバートラム卿の家父長の姿も一層鮮明になる。女性のセクシュアリティを特徴とし、男性を支配しようとするメアリが自らの道徳的腐敗に気づくことなく、最後の10数章では物語の表舞台から抹殺される。それに対して、「自己」及び「他人」に対する認識力を持つ、道徳的向上心を備えたファニーはマンズフィールド・パーク荘園の中心人物にな

った。ここからオースティンは女性の機能主義的な定義（性行為や出産との連想から生じる機能主義）を否定し、女性の知力、道徳的向上を肯定する姿勢がみられる。

第三章では、『ジェイン・エア』のフェミニズム研究に取り組む。第1節では、『ジェイン・エア』の日本語訳と中国語訳に焦点をあてて、フェミニズムの視点からみる『ジェイン・エア』の翻訳における相違点や類似点がどのような問題をはらむのかを解明する。第2節では『ジェイン・エア』に描かれる「悪しき母」、「不完全な母」及び「良き母」に注目し、この三つのタイプの母親像がどのような意味を持つのかという点を論じる。オースティンの『高慢と偏見』、『マンスフィールド・パーク』の中で、父（あるいは男性キャラクター）はヒロインの成長を導き、母の存在感は希薄化される傾向がある。しかし、ブロンテは、母を疎外することに異議を唱え、母という存在そして母の力が子供の成長に欠かせないというプロットを提示した。その背景には、男権、あるいはその社会制度に依存して暮らせるように服従精神を身につけた女性を批判すると同時に、女性の教育を担うのは女性であるというブロンテの意識が反映されている。

第二部では近代中国におけるフェミニズムの研究に重きをおく。中国フェミニズムの特徴は儒教的家父長制と深く関係する。第四章ではこの特徴について検討する。

五四運動として総称される1910年代後半から1920年代前半へかけての、新思想・新文化運動のひとつの柱は、反封建、反儒教であり、その打倒ののちに築かるべきは、デモクラシーとサイエンスに集約され、近代的な世界観、人間観に基づく社会であって、そのひとつの具体的なかたちとして、女性解放が重視されたのである。五四新文化運動の主唱者はほとんど留学の背景を持つ若い知識人である。男女問わず、彼らの最大の関心事は、欧米の自由民主主義と中国の伝統的徳や宗教との対立である。その対立は伝統の「旧式結婚」において最も激しく表現される。

第五章の謝冰瑩の『ある女兵士の自伝』は旧式の結婚の最大の被害者たる女性の弱い立場と、それから「家父長」の圧力というものに非常に強い関心が示される。伝統の中国社会において、母は娘の結婚相手の決定権、娘の監督権を握る。ここから中国の家父長制の特徴がみられる。イギリスの女性と同じく、中国の母の地位にある女性は「物質的基礎」を持っていない。しかしながら、中国の母は息子に儒教の伝統的「忠孝思想」を教育することをとおして男性中心の家父長を支え、家長たる男性の権力の制約を受けながら、「母の権威」を保つことができると考えられている。そのため、『ある女兵士の自伝』のような旧式結婚という主題を扱った作品では、主人公は直接に母を反逆するというプロットが多い。

第六章の『ソフィ女子の日記』は、比較的高い近代的教育を受けた、若い知識人女性ソフィの性愛上の矛盾した心理を描く物語である。1920年代に西洋の性解放に関するさまざまな理論や観念が留学背景を持つ若い知識人によって当時の中国社会に輸入される。そのときにもたらされた現代的な性観念は、中国の伝統的な性観念に衝撃を与え、一部の女性の性解放を促進させたと言えよう。ヒロインのソフィは、性的欲望に覚醒している女性である。彼女は凌吉士という男の容貌に恋をし、「肉体的な欲望」を持ち始める。しかし、俗悪な凌吉士は、ソフィにとって理解しあえる存在ではない。ソフィは彼に「精神的な愛」を求めることはできない。ソフィに告白した葦弟という男がいる。しかしソフィは彼との恋愛結婚に乗り気でない。ヒロインのソフィは二人の男性、「精神的な愛」と「肉体的な愛」、「新道徳」と「旧道徳」の間でのジレンマにある。このソフィの苦痛は、1920年代当時の知識人女性たちが経験していたことを示していると言える。

以上の論証から、結論では、オースティン、ブロンテと近代中国の女性作家たちが描いた女性像のフェミニズム的意義を再度強調している。19世紀のリベラル・フェミニズムを起点に、オースティン小説やブロンテ小説のヒロインを基本に据えながら、最終的に中国女性作家たちの小説を考察することで、リベラル・フェミニストの主張とともにヒロインたちが確実に変容していたと言えよう。この変容の歴史的経緯を追跡し、過去の作家や作品から受け継いだものを分析し精査することは、回顧にとどまらず、現代中国フェミニズムの行方を考える上で非常に有益なものであると言える。